上野早生・大浦早生の特性比較

松崎重雄・岩永秀人・野方俊秀・江原忠彰・*中牟田拓史（佐賀県果樹試験場，*佐賀県農業大学校）

Shigeo Matsuzaki, Hideto Iwanaga, Toshihide Nogata, Tadaaki Ehara and Takushi Nakamuta : Characteristics of Very Early Ripening Satsuma Mandarin "Ueno" and "Oura"

県内で宮川早生温州の枝変りとして発見された上野早生は，果形が扁平で果皮の着色および減酸が早く，浮皮になりにくい早生温州である。しかし，大浦早生と外観，品質が著しく類似している。そこで両系統の特性を明らかにするため，比較調査を行ったので，その結果を報告する。

１．試験方法

佐賀県果樹試験場（花崗岩を母材とする砂壌土）の南面向き傾斜地に植栽された，カラタチ台26年生尾張系普通温州４樹（１樹を１ブロックとして４反復）を中間台木として，1979年４月に上野早生と大浦早生を主枝又は亜主枝に10口前後腹接し，樹勢および枝葉，果実の外観，品質等を比較調査した。

２．調査結果

１）樹勢は両系統間に差がなく，宮川早生と同程度の傾向にあった。枝葉の特性については，両系統とも開張性であり，とげの発生はなく，春葉の葉幅，葉長，葉面積，葉柄の長さについても有意な差は認められなかった。

２）着花量は両系統とも1983年は極めて多く，1984年はやや少であり，開花期については上野早生が始，盛で１～２日早い傾向にあった。

３）果形については，両系統とも幼果期から扁平で，成熟期では大浦早生のほとんどの果実が果形指数1.3以上となった。一方，上野早生は1.3未満の果実が多かったが，有意な差は認められなかった。

４）果皮の着色については，両系統とも９月下旬に果実全体から淡緑色に退色し，果頂部から黄橙色の着色がはじまった。10月下旬に完全着色となったが，両系統間には有意な差は認められなかった。

５）1984年は結実量が少く，供試果実重は1983年より大きい傾向にあった。両年とも果実重，横径について大浦早生のほうがやや大きかったが，有意な差は認められなかった。

６）果実比重についても両系統間には差がなく，11月中旬でも0.9以上を示し，浮皮になりにくい特徴が現われた。

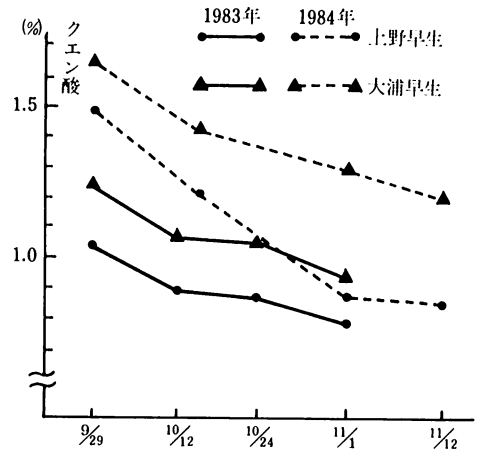
７）果皮厚は1983年が厚い傾向にあったが，両系統間には差が認められなかった。

８）果皮歩合は両年とも完全着色になるに従い，増加傾向にあったが，両系統間には差が認められなかった。

９）Brix は，1983年は大浦早生のほうがやや高く，９月下旬にのみ有意な差がうかがえ1984年は逆に，上野早生が高い傾向にあったが，有意な差は認められなかった。

10）クエン酸含量については，1983年は９月下旬から11月上旬の全期間に上野早生が大浦早生より0.2%前後低い傾向にあり，1984年は９月下旬から熟度が進むにつれ，その差が経時的に広がり，上野早生は大浦早生より酸含量が有意に低かった。

以上の結果から，上野早生は大浦早生に比較して，樹勢，果実の外観，形質はほとんど類似しているものの，成熟期におけるクエン酸含量には差があり，上野早生が大浦早生より明らかに減酸が早い傾向が認められた。



第１図　クエン酸含量推移

第１表　果実分析の内容　（1983年10月12日分析）

系統名	果実重	果形指数	果実比重	果皮歩合	果		皮		Brix	クエン酸
					L	a	b	厚さ		
	g			%				mm		
上野早生	120.6	1.32	0.93	15.9	61.0	3.5	37.9	4.2	8.7	0.86
大浦早生	120.9	1.36	0.93	15.9	61.7	5.6	38.6	4.3	8.8	1.04
有意性	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	＊＊

第２表　果実分析の内容　（1984年10月15日分析）

系統名	果実重	果形指数	果実比重	果皮歩合	果		皮		Brix	クエン酸
					L	a	b	厚さ		
	g			%				mm		
上野早生	164.3	1.29	0.92	17.1	63.6	18.6	40.2	2.4	10.2	1.20
大浦早生	194.5	1.33	0.91	17.6	63.8	17.4	40.5	2.5	9.9	1.45
有意性	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	＊＊